

二〇二一年度

高松教区 司教書簡

社会と共に歩む教会をめざして
―「主の祈り」を黙想する―

高松司教

使徒ヨハネ 諏訪榮治郎

二〇二一年度 高松教区司教書簡 社会と共に歩む教会をめざして

― 「主の祈り」を黙想する ―

はじめに

- ・主の復活は希望をもたらす
- ・立ち止まる時
- ・黙想
- ・「主の祈り」

主の祈りの黙想

(1) 「天におられる 私たちの父よ (永遠のきずな)」

- ・神の愛が私となった
- ・永遠の絆
- ・イエス・キリストによって

(2) 「み名が聖とされますように (感謝と賛美)」

- ・人生の主人公
- ・きつと意味がある
- ・阿南慈子さんの場合

(3) 「み国が来ますように (喜びの広がり)」

- ・愛の広がり
- ・右手の萎えた人のいやし
- ・神の国を見つけた少年

(4) 「み心が天に行われるとおり 地にも行われますように (希望と信頼)」

- ・私たちの本国は天にあるのです

- ・天に行われるごとく
- ・星野富弘さんの場合
- ・オメガ点に向かう進化

(5) 「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください (隣人となる)」

- ・分かち合う
- ・分配のこと
- ・大地の実り
- ・森のイスキア
- ・日々の糧
- ・「私はまことのパンである」

(6) 「わたしたちの罪をお赦しください 私たちも人をゆるします。

(神の子の自由)」

- ・不調和
- ・罪の連帯 (原罪)
- ・自分を信じること?
- ・信仰による義
- ・神の愛と赦し
- ・「赦しの恵み」に向けて
- ・「ゆるす」ことによって

(7) 「わたしたちを誘惑におちいらせず 悪からお救いください。

(自分自身を大切に)」

- ・闇に光が輝いた

二〇二一年度 高松教区司教書簡

社会と共に歩む教会をめざして

「主の祈り」を黙想する

主の復活は希望をもたらす

いよいよ主の復活祭が近づいてまいりました。エルサレム巡礼の途上、『人の子は三日目に復活する。』と、イエスはすでにご自分の受難と死を予告する際に使徒たちに希望を告げておられます。復活によって豊かに聖霊と希望を注ぐことを約束されたのです。御父のいつくしみによって開かれる未来に、私たちは（闇ではなく）希望の道に招かれたのです。

立ち止まる時

いつであったのか、毎週毎週、教会行事を忙しくこなしている中で、時に「旧約時代にある安息年のように（レビ記25・1）1年間の全き安息年、立ち止まる時がほしいものだ。」と語り合っていました。コロナ禍ゆえに集会への配慮が要請され、私たちは立ち止まらざるを得ない時を迎えました。仕事の手を休め、一人ひとり立ち止まり、その手を合わせ天の父に向かいます。ミレーの「晩鐘を」思い起こします。イエスご自身もしばしば、一人で人里離れた山に登り、御父に祈っておられた。（マタイ14・23）これを禅の世界では「入山」といいます。弟子たちは主に従うものとしてどのような生き、祈るのか、主に尋ねます。主は弟子たちにこう祈りなさいと「主の祈り」をお与えになります。（マタイ6・3）

黙想

以来、「主の祈り」は弟子たちから始まり、世界中どこでも連綿と祈り継がれている祈りです。日ごとに唱えている「主の祈り」ですが、ともすれば祈りに込められた一つ一つのことを振り返ることなく、ただ唱えているだ

けになっているのではないのでしょうか。その祈りの思いを受け止め、日々の生活にどのようなかわり、生きる道であるのか黙想したいと思います。日本という小さな島国で生きるわたくし個人の本当に限られた体験や思いではありますが、皆さまの信仰生活に役立つのであればありがたく思う次第です。紙面が限られていますので、文中の聖書箇所引用箇所はご自分で聖書をひもとき、み言葉を味わい、ゆつくりと、また、分かち合いながら「主の祈り」の霊性を汲み取っていただけたらありがたいと思う次第です。

「主の祈り」

「主の祈り」は7つの祈りからなっています。（マタイ6・9）前半4つの祈りは御父への賛美を祈り、後半の3つの祈りは私たちの日々の生活への願いを祈ります。この7つの祈りにおいてイエスに従うものの生活が成り立つことがわかります。前半4つの祈りが失われた時、残るのは自分勝手な欲のとりこのような祈りとなってしまいます。「7」とは「完全数」といわれキリスト者として私たちの生きる道が示されています。

- (1) 天におられる わたしたちの父よ、
- (2) み名が聖とされますように。
- (3) み国が来ますように。
- (4) みこころが天に行われるとおり 地にも行われますように。
- (5) わたしたちの日ごとの糧を 今日もお与えください。
- (6) わたしたちの罪をおゆるしくください。わたしたちも人をゆるします。
- (7) わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。

主の祈りの黙想

(1) 「天におられる 私たちの父よ (永遠のきずな)」

神の愛が私となった

「父」への呼びかけが始まっています。私をお創りになったお方。私のすべてを包み、私のすべてを知っておられるおとうさん。『神は言われた。光あれ。こうして、光があつた。神は光を見てよしとされた。』(創世記1・3～4) 神のことば(思い、望み、愛)が私となったということです。永遠のことばによって生まれた私がいいます。私が私であるために、日々、私に呼びかけ、私の人生を永遠の絆で結ばれるおとうさんは、私が私であることを願っておられるのです。天の父は私の人生の主人公なのです。神の慈しみによって命を与えられた私は、自分を大切にして生きるために、この「主の祈り」を毎日、大切にささげているのです。

永遠の絆

父よ、あなたがどのようにお方であるかは、あなたが御子イエスを遣わしご自分をあらわされました。『わたしはあなたを愛した。』(ヨハネ15・9) 天の父は私たち一人一人を「あなた」と呼び私の存在を喜ばれるのです。そのきずなは消えることがないのです。それはあなたが「良い子」だからではなく、あなたが「あなた」だから。私の存在を丸ごと愛してくださる方なのです。

『父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残

るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。』(ヨハネ15・9)

イエス・キリストによって

『わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。』(エフェ1・3)

(2) 「み名が聖とされますように (感謝と賛美)」

人生の主人公

創造主への感謝。いのちの喜び。わたしは恵み(タレント)を預かり、「私が私であることを大切にしなさい」と、毎日、呼びかける声がします。無意識にでもその呼びかけに答えているわたしたちです。(人と比べる人生ではなく)毎日をわたしらしく大切に生きたい。人生の主人公は、父であるあなたであることに気づきます。人生が天の父へのたえざる賛美と感謝になりますように。

きつと意味がある

時に涙にくれ、希望を失い、自分であることに嫌気がさし、息をするのも嫌な時があります。想定外の出来事にみまわれる時もあります。しかし歩んできた道を振り返って見たとき、それには意味があった、私に必要な十字架であったと気づきを与えてくれたダイナミックメモリーを思い出します。また旧約聖書にあるヤコブの息子ヨゼフを思い出します。苦しい人生体験を経た彼がエジプトに助けを求めて来た兄たちに語った言葉を思い出します。

『あなた方は私に悪をたくらみましたが、神はそれを善にかえ・今日のようになしてください。』(創世記 50・20)

この言葉は聖書の一貫した人生観ではないでしょうか。ダヴィデの歌、詩編 139 編をゆつくりと味わってみましょう。

太陽の賛歌(アシジのフランシスコ)

神よ、造られたすべてのものによって、わたしはあなたを賛美します。

わたしたちの兄弟、太陽によってあなたを賛美します。太陽は光をもつ

てわたしたちを照らし、その輝きはあなたの姿を現わします。

わたしたちの姉妹、月と星によってあなたを賛美します。

月と星はあなたのけだかさを受けています。

わたしたちの兄弟、風によってあなたを賛美します。

風はいのちのあるものを支えます。

わたしたちの姉妹、水によってあなたを賛美します。

水はわたしたちを清め、力づけます。

わたしたちの兄弟、火によってあなたを賛美します。

火はわたしたちを暖めよるこばせます。

わたしたちの姉妹、母なる大地によって賛美します。

大地は草や木を育て、みのらせます。

神よ、あなたの愛のためにゆるし合い、病と苦しみを耐え忍ぶ者によつ

てわたしはあなたを賛美します。終わるまで安らかに耐え抜く者は、あ

なたから永遠の冠を受けます。

聖マリアの賛歌

『私は主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように。』(ルカ

1・37) 天使ガブリエルから「受胎」を告げられたマリア様のことばです。心に刻みつけておくべきことばです。毎日の「教会の祈り・晩課」

にも「マリアの賛歌」があります。私たちキリスト者の大切な祈りとな

っています。(ルカ 1・46) 父よ、この私ではなく、あなたが賛美され、尊まれますようにと信頼のうちには日々祈るのです。

阿南慈子さんの場合

幸せな結婚生活に恵まれていた阿南慈子さんは、ある日突然、身体あらゆる機能が失われていく「多発性硬化症」の病に取りつかれました。活発な学生時代からは想像もできない病状の日々は、家族や多くの方々の支えの中で、新しい思いに生きることになります。

『病気も車いすも、すべては神さまからのわたしへのプレゼント』と神への感謝を語ります。病の進行の中いつか祈ることもできない日が来ることを予感するのです。『最後に残るのは神から愛されていることこれだけ』と告げておられます。

* 阿南慈子 (二〇〇一年) 「ありがとうあなたへ」 思文閣出版 より引用

(3) 「み国が来ますように (喜びの広がり)」

愛の広がり

主イエスの宣教のテーマは「神の国」でした。「神の国」こそ私たち人生の旅路の課題です。わたしたちは命と希望をいただき、「み国」のために呼びかけを受け、遣わされます。わたしたちはあなたの「み国」にあこがれて、日々の判断やさまざまな選択をするのです。すべての命が大切にされ、神の国の喜びを分かち合い「愛の広がり」へと導かれるのです。教皇フランシスコが日本の青年たちに語った言葉を思い出します。

『何のために生きるか?』ではなく、『誰のために生きるのか?』を大切にしてください。』

右手の萎えた人のいやし

『また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。』(ルカ6・6)

(主イエスのもたらしたもの)

主イエスはこの人に、何をもたらしたのでしょうか？

(どうぞ書き出してみてください。・そして分かち合ってください。)

愛 受け入れる 喜び 救い 不安からの解放 平安 光 共感

歓喜 希望 自由 取り戻し 復活 平和 人権 尊厳 賛美

驚き 仕事 社会関係 健康 家族の絆 信仰 確かな歩み…

*神の国は広がっていくのです。からし種とパン種のたとえ

(ルカ13・18)

(律法学士やファリサイ派の心にあったもの)

その時、彼らの心に渦巻いていた思いは？

(どうぞ書き出してみてください。・そして分かち合ってください。)

憤り 敵意 排他的 特権意識 高ぶり 上から目線 策略 合法

主義 正義は我にあり 盲目の闇 無関心 慣習と規律 攻撃性

妬み 差別 保守安泰 殺意 無理解 圧力…

*神の国の喜びを理解しえない世界

神の国を見つけた少年

東日本大震災から10年経ちました。大船渡ベースが立ち上がったころから高校生たちもボランティア活動に参加してくれました。しかし中には気が進まず、いやいや連れて来られた生徒もいたのです。彼はミーティングの間もスマホをいじくり、気が向かない活動に割り振られ、重たそうに現場に出ていきました。その日彼は壊滅したホタテ貝の小屋での仕事でした。どうなるのかと思っていたのですが、夕方になりベースに戻って来た彼を見ると涙を流しているのです。どうしたのと尋ねると「僕たちはいのちがあるんですね」と言い出した。「生きているんですね！」泣きながら語りだした。「死んでいると思って手に取ったホタテ貝に指をギュッと挟まれた。痛い。貝が力いっぱい僕に話しかけてきた。この貝は生きていた・貝の命がぼくに訴えてきた。貝がぼくに語り掛けてきた。心が通じ合った・うれしくて、うれしくて、涙が止まらなくなった。こんなこと教科書に書いていなかった。」その日からの彼は喜びに輝いていました。宝を見つけたのです。(マタイ13・46)

(4)「み心が天に行われるとおり 地にも行われますように(希望と信頼)」

父よ、あなたのみ心は私たちがともに感謝と賛美をささげることです。それを成し遂げるため遣わされた御子イエスは、わたしたちと共に歩み、御子は絶えず父を見つめ、全き従順により、父のご計画に従われました。主の十字架は父の慈しみ、その復活は永遠の希望となりました。この「過ぎ越しの神秘」により御父と御子の絆である聖霊がまず使徒たちに注がれ、新しくされた人々は主の復活の日曜日を祝い、感謝と賛美を捧げているのです。

私たちの本国は天にあるのです

この世で私たちは「安心」を探し求めます。この「安心」を得るために、時に大金を支払ってでもそれを手に入れたと思います。対価を支払い、手

を横に伸ばし「安心」を手に入れるのです。しかしこの安心がいつかなくなるかもしれない「不安」を感じ始めるのです。「安心の数だけ不安」があるようです。しかし「平安」という言葉もあります。人間の目で見たとき弱く、貧しく、小さな者とされた人々の中に、また人生に波風が荒れようと、今を「平安」のうちに生きる人がいます。「平安」それはお金では買うことはできません。「平安」は天の父から与えられる失われることがない恵みなのです。「平安」に包まれる時、『神が私の味方である』ことに気づき、逆境においても生きていくことができるのです。(ロマ書8章)『私たちの本国は天にある』と聖パウロは語ります。(フィリッピ3・7～21) 私たちはこの世の価値観だけがすべてではないことを柱として持っています。時に立ち止まり本来の故郷を探し求め熱望しているのです。(ヘブライ書11・8～9)

天に行われるごとく

主イエスの宣教テーマは「神の国」でありました。「調和」という意味かもしれせん。神の創造の中で人は自分を受け入れ、互いに隣人となり、環境は喜びとなる、その土台は神との調和でした。主イエスの宣教は「神の国・調和」の取戻しでした。時に人が人間であることを拒否され、あらゆる差別や社会の構造悪にひとが悲しみ苦しむのを見るとき、『主は深く憐れまれた。』・とあります。憐れむ(スプランクノン)それは激しく哀れむ 肝が痛む、激しく憤る、の意味で使われた言葉です。(マタイ9・36)主イエスは父の愛を取り戻すため、手をさしのべ、この人々に「父の慈しみ」の喜びを共にしたのです。時にそれは当時のユダヤの律法を超えていた(法を破る)行為だったのです。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵あるものや 賢いものには隠して幼子のような者にお示しになりました。そうです父よ、これが御心になうことでした。』(マタイ11・25～26) 人々はイエスを歓迎しながらも、当惑を覚えます。後日、人々は十字架を担わせることに同意したのです。今も法(国是)を超えて、神の心にある思いを寄せたことにより殉教者たちが生まれているのです。神の心でない法

(社会)をそのままにすることはできないのです。

「私たちは譲ることができないのです」天を仰ぐ殉教者たちの言葉です。

星野富弘さんの場合

若き日に体育の教師となり指導中の事故によって手足の自由を失い、わずかに動く口に筆をくわえ、詩と絵を描き続ける星野富弘さんの書から。

ひとは空に向かって寝る 寂しくて空に向かい
疲れ切って空に向かい 勝利して空に向かう
病気の時も 一日を終えて床につく時も
あなたが人を 無限の空に向けるのは
永遠を見つめよと 言っているのでしょうか
ひとは 空に向かって寝る

* 星野富弘(一九八二年)「風の旅」立風書房 より引用

いのちが 一番 大切だと おもっていたころ
生きるのが 苦しかった
いのちより 大切なものが あると知った日
生きているのが 嬉しかった

* 星野富弘(一九八六年)「鈴の鳴る道」偕成社 より引用

オメガ点に向かう進化

私が神学生のころ日本中に学園紛争が起きました。ベトナム戦争も泥沼化しており、なんのために戦っているのか混沌とした時代でした。平和の歌を歌い続けるわたしたちの間では、イエズス会司祭であり考古学者としてあった「テヤルド シャルダン」の書が読まれていました。シャルダンは人類の進化に関する壮大な仮説を提示していました。人間は、意志と知性を持つことより、物質圏を越えて、生物進化の新しいス

テージ「精神圏」へと入ったと説きます。未だ人間は未熟な段階にあるが、宇宙の進化の流れは、精神世界の確立へと向かっており、人間は、精神の究極点である「オメガ点」へと進化の道を進みつつある。オメガは未来に達成され出現するキリストである。この地球の進化はキリストに向かつての進化である。進化の終末は地球の滅びではなく、この地球の完成である。神はこの大地を愛によって、愛のために創られた。※「現象としての人間」より

いまコロナのみならず経済や自国中心主義のコントロールのきかない危機の波をむかえています。私たちは単なる（力関係の）民主主義を超えた「福音」を選び取り、「すべての命を守るために」生き続けたいと願っています。同時に世界中で捧げられる「主の祈り」を通して神の心が流れ、完成へと向かわせてくださると信じているのです。

（５）「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください（隣人となる）」

分かち合う

1年間の研修としてフィリピンで生活をしたことがありました。真夏のマニラ市内では木陰を探して歩きます。ある休暇の日、暑さに耐えきれず路端の店でコーラを買いました。冷えたコーラを一気に飲み干し、「あゝ生き返った。」と。友人はゆつくりとまだ半分しか飲んでいませんでしたが、一息つくとそのビンをそつと足元に置きました。半分しか飲んでいないのに捨てるのか？もったいない。歩きはじめてふと振り返ると一人の少年がその半分のコーラを大切に飲んでいました。しまった！。お金を出して買ったものは全部自分のもの・・と思いついて今まで生きてきた自分が本当に恥ずかしい存在と気づかされました。またある日、日本から体験学習に來た青年たちと一緒に、ある村に泊めていただいたことがありました。夕食にはおいしそうな川魚がいっぱいふるまわれました。若者たちは目を輝かせ出された魚

を全部きれいにすっかりいただきました。私たちが寝たあと夕食の残りを家族の皆さんが分かち合って食べるということを知りませんでした・・・。

分配のこと

日本では年間1900万トンの食品が捨てられていると報道されています。世界では食料が不足しているのではなく分配に問題があることは明らかです。品質に問題のない恵方巻がベルトコンベアーに乗せられどんどん捨てられゆくさまを見ると非常に心が痛みます。学校給食のない日（夏休み）「先生なにか食べるものない？」と聞いてくる子どもがいると聞いたことがあります。「子どもの貧困」問題をまえに立ちすくんでしまいます。そしていくつかの家庭を思い出します。

大地の実り

司祭叙階を前に東京都の西のはずれにある「秋川神冥窟」という禅道場（イエズス会）にお世話になっておりました。パウロの言葉『生きているのは私ではない。キリストが生きておられるのだ。』（ガラチア2・20）このみ言葉を何としても「本当です。」と腹で分かったかったです。毎日毎日、壁の前に坐りこみました（面壁）。何か月坐ってもらわねえがきません。そんなある日、お茶碗に盛られた山盛りのごはんが前に置かれました。白く光って美しいご飯でした。きれいだなーと見つめておりました。おや一粒一粒のお米がニコニコと私を見えています。お米としてここに來るまで150日ほどかかったのでしょうか。太陽の光を一杯に浴び、雨や大地の水を吸って、やさしいさわやかな風に吹かれ、お百姓さんの愛といたわりに育まれここまで大きく育った一粒のお米が、今山盛り目の前に光輝いているのです。目の前にあるのは愛の塊だとはっと気がついたのです。もったいなくて食べられません。生まれて初めて心から手を合わせて「いただきます」と申し上げました。それは「聖なる拝領」まことの「聖体拝領」でした。大地の実りは神様からの恵

みなのです。野山の花も、杉の木も、この大地も、そしてこの私も、すべての命は一つ。全ての存在は、神の愛の結晶でした。

森のイスキア

岩木山のふもとに「森のイスキア」という家があります。佐藤初女さん（故人）が主催されていました。現代社会に生きるのが難しくなった方々がここを訪れ、初女さんからのちの贈り物（おむすび）をいただくのです。若いころ病床にあった初女さんは処方された薬を飲んでいたので、ある日、山に咲く大地の実りをいただくことにしたのだそうです。「食べると体内の細胞が躍動するような感じになりました。わたしは食べることを大切にしよう」と考えたのです。

以来、丁寧に手間をかけ、おむすびの梅干しを我が子のごとく育み、心を込めてご飯を炊き、訪問者と「いのち」を分かちあうのです。いただいた方は元氣を取戻し帰っていかれるそうです。

日々の糧

主の祈りの「日々の糧」の英文は "daily bread" となっています。直訳すれば「毎日のパン」となるのですが、日々の糧がなんであるのかはもうお分かりのことと思います。もちろん食料に関する事でもあります。人が人として生きていくためのあらゆる糧のことですね。

励まし、寄り添い、愛、信頼、希望、友情、正義、平和、思いやり、音楽、学び、赦し、奉仕、などなど・・・生まれてから私たちがいただいた日々の糧はどれほどだったでしょう。父母から、周りの人々から・・・毎日、いのちの糧で包まれているのを思うとき、この世は感謝の心で成り立っていることを再確認いたします。しかし「日々の糧」への妨害や破壊が地球を覆い、私の心にも渦巻いていることを自覚し、そのために日々全力をつくすのです。一つの花が美しく咲き育つのか、それとも枯らしてしまうのか・・・その人を幸せに育むのか、否か、隣びとへの私の責任なのではないでしょうか。『あな

たもその人の隣人になりなさい』（ルカ 10・36～37）

「私はまことのパンである」

五つのパンをイエスに従ってきた人々に配られた出来事を思い起こしてみましょう。主はパンを取り父に感謝を祈ったのち、弟子たちにパンを配らせます。『すべての人が食べて満腹した。』（マタイ 14・20）とあります。

パンがどのように増えたのだろうかといぶかしがる人もいますが、ミサを思い起こしてください。司祭はイエスの言葉を唱え、人々に配ります。

パンがむくむくと増えることが、問題なのではなく、世界中のミサにおいて、人々にイエスが与えられ、私たち一人一人を生かし、イエスの存在が教会となり、パンは与え続けられているのです。（ガラテア 2・20）「日々の糧」とは主イエスご自身であることを私たちは知っています。

『わたしが命のパンである。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。』（ヨハネ 6・32）

さらにミサ典礼において私たちは「平和のあいさつ」をします。それは単なる「あいさつ」ではなく、お互いに日々の糧を分かち合い、支えあう姿を表しています。主イエスの心を分かち合う教会の姿ではないでしょうか。

(6)「わたしたちの罪をお赦してください わたしたちも人をゆるします

〔神の子の自由〕

不調和

人生において私たちは、自己自身、隣人、環境において「不調和・虚しさ」を味わいます。とりわけ私たちを取り巻くこの「共通の家」を汚し破壊し続ける罪は、弱い立場に置かれた人々をさらに苦しめる結果を招いていることに気づきます。なぜ、生きるにかくも苦しく、不調和を感じるのでしょうか。

その理由を先哲たちは、善悪をわきまえない無知から・人間の弱さゆえ・性悪説を唱え・社会悪ゆえ・運命論者は星のせいになります。しかし聖書は「神との調和(絆)」を捨てた人間が、自身を世界の中心とした「ゆえである」と語ります。(創世記3章)

罪の連帯(原罪)

「あれは私なのです」一人の青年が警察官に拘束され引き立てられていきました。その周りを取り囲んでいた人々は、陰悪な目でその青年をにらみつけています。中には罵声を浴びせかける人もいたようです。そんな陰悪な状況の中で、ひとりの老人が、引き立てられていく青年に向かって静かに手を合わせ合掌したというのです。「彼はわたしなのです・彼と同じ境遇だったなら私も同じことをするのです。彼はわたしなのです」。ある条件が備わっていたのでブレーキとなり、その罪を犯すことがなかったかもしれません。しかし私もその罪を犯すかもしれないのです。ここに人間として罪の連帯(原罪)があるのです。ですから「わたしたちの罪」をお赦してくださいと祈るのです。罪の赦しを求め、神との絆の取戻し、和解を祈り願うのです。しかしどのように神との調和を取り戻せるのでしょうか？

自分を信じること？

あるプロテスタントの牧師さんの言葉が忘れられません。「自分を信じる

ことは罪ですね」。その方は若い時「馬が好き」で毎週競馬場に通っていたそうです。(依存症だったかもしれません。)家族にさんざん苦勞をかけたついに最終宣告が下ります。「もし今度競馬場に行ったら離婚します」と。家族に謝り「もう絶対に行かない」と決心したのですが・・・次の週、気が付いたらすっかりと馬券を握って馬を見ている自分がいた・・・のだそうです。こんななじめな自分はどうしたらいいのか、彼は死に場を探したそうです。「自分を信じることは罪ですね」の言葉が忘れられません。

パウロ・ロマ書(7・18)

『わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなさうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなさうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。』

信仰による義

「悪」とは「善の欠如」である。「罪」とは「愛の欠如」である。しかし善や愛の取り戻しは、自分の努力・根性ではできないことを私たちは知っています。自力では変えることができないことを体験しています。赦しも愛もわたしの力ではなく、神からの一方的な恵みだと聖パウロは「神の愛の先行・信仰による義」を語ります。深く味わってみたいと思います。

『すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。人はみな、罪を犯して神の栄光を受けられなくなってい

ますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、神の義をお示しになるためです。では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。』(ロマ書3・21)

神の愛と赦し

神の愛と赦しを黙想するとき、人間の相対的な愛と赦しから神の愛と赦しを推しはかることはできません。神の愛と赦しは究極な絶対だからです。私たちが何か良いことをしたから神が愛し、赦しが与えられるのでありません。ましてや人間から頼まれたから愛し、赦す神ではありません。愛も赦しも人間からではなく、全き神からのものだからです。『父よ赦してください。何をしているか分かっていないのです』(ルカ23・34) 時間を超えて先に赦しがあったのです。そこに人間の業が入る余地はないのです。神と私たちとの絆、それはただ神からの愛なのです。私たちが手を放しても神は私を握った手を離さないのです。だから愛が全うされるのです。それゆえ愛も赦しもただただ神の恵みなのです。『では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。』(ロマ書3・27) 御子イエスの死と復活によって人類を救われたことへの、父への「神に感謝」のことばしかないのです。

「赦しの恵み」に向けて

わかっておきたいこと

罪の赦しを黙想する目的は神の愛をより良く理解するためにあります。従来私たちは【私の罪↓地獄への恐れ↓痛悔↓恥ずかしくとも告白する↓罪の赦しをいただく↓安心】と思っていたのではないのでしょうか。(ここには自分の安心感があるかもしれませんが、主の愛は忘れられているのです。)主

の十字架を見つめていると上記の過程とはまるで逆であると気づきます。まず先に御父に対する主イエスの弁護の祈りがあったのです。『父よ、彼らを赦してください。自分で何をしているかわからないのです。』(ルカ23・34) 罪の基準が主のイエスの瞳(愛)にあります。(それは自分の心ではないのです。)

・イエスを見つめる。自分が何ものであるかが分かるのは、イエスの愛を見つめ続けたときです。

・キリスト者の生きる基準はイエスの愛です。イエスの愛を見失う時、「罪の花」が咲くのです。

・この大地を汚した「環境への罪」が、多くの弱い人々を苦しめる結果に。
・人類の罪への連帯を思い、わたし個人の赦しよりも人類の罪の赦しをイエスとともに祈るのです。

・イエスの愛に生きるとは、洗礼・堅信を生きること。『彼に聞け。』

・共同回心式は、堅信を受けた祭司集団としての教会が「罪の連帯」から「赦しの連帯」を担うのです。

『主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。ここでいう主とは、「霊」のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。』(エペソ書3・18)

「ゆるす」ことによって

アーミッシュの場合

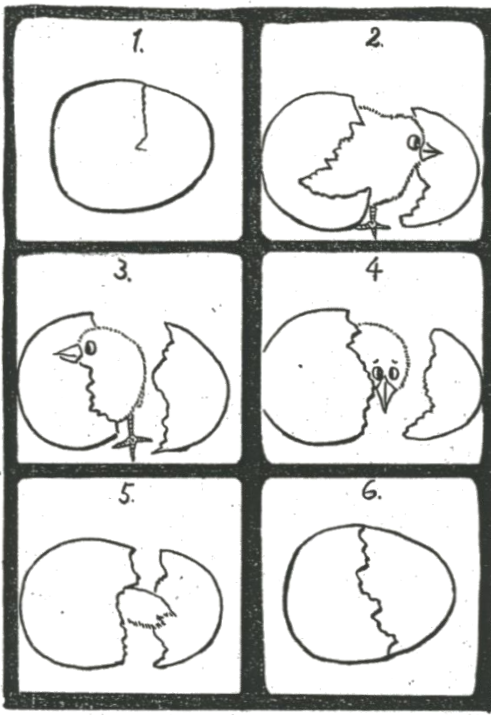
2006年10月、俗世間から隔離されていた平和な(ペンシルベニア州)アーミッシュの学校に銃を持った男が乱入し、女性徒5人を射殺しさらに5人に重傷を負わせる事件が起ったのです。全米に大きな衝撃が走りました。犯人はその場で自殺したのですが、長い間恨みをもって生きてきた人でした。

かつて自分の大切な娘が病死したことへの悲しみと怒りから立ち上がれ

ず、同じ年の少女を見ると妬みにとりつかれていたのです…。しかし事件後更なる衝撃が走ったのです。殺された少女の家族が、犯人の家族を訪れ犯人の家族に「ゆるし」を告げたというのです。傷ついた遺族が心配したのは犯人の家族のその後の生活であったというのです。犯人の家族がこれから後どこに移り住んだとしても常に後ろ指をさされ、就職もままならず社会から抹殺され、隠れた生活を余儀なくされるであろう。その子供たちの将来はどうなるのだろう。また殺された遺族もこれから後、悲しみと苦しみに責めさるいなまれ、あの日から止まったまま恨みと復讐にとらわれた愛のない日々を送るだろう…。そこにはなんの光もさしてこない。生きていけなくなる。どうすればよいのか。「ゆるす」ことによって憎しみにとらわれた冷たい日々から解放され、自由になりたい。そして犠牲となった子供たちの葬儀に犯人の家族を招き、犯人の埋葬にもアーミッシュの方が何人か参列し、手を握り犯人の夫人を抱きしめ「恨みも憎しみもない」と言い「ゆるし」を告げたというのです。「ゆるし」は囚われからの解放と新しい関係を生みだすのです。

(7)「わたしたちを誘惑におちいらせず 悪からお救いください
(自分自身を大切に)」

この図の一つ一つにあなたの言葉を入れてみてください。



Taken from Poster RETREAT Western Graphics U. S. A.

祈ります。神よ、あなたはわたしたちの貧しさと弱さをご存じです。人生から差し込まれる様々な試練の中で、わたしたちは恐れと不安にとらわれます。あなたの助けがなければ、わたしたちは、自分を閉ざし、道を歩くことができません。私をお創りになったあなたは私たちの味方です。あなたの慈しみをいつも感じさせてください。

そして、わたしたちが社会の状況や現実の自分自身にあきらめることなく、日々、神の国の理想と希望を大切にして、ともに歩めますように。聖霊を与えてくださる御父と御子キリストによって。アーメン。

私たちを取り巻きさまざまな誘惑は、目を曇らせ、耳をふさがせ、私たちを不自由にします。

ふたたび 聖パウロの励ましの言葉を黙想しましょう。(ロマ書 8・31)

『もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。』

闇に光が輝いた

ヨハネ1章に『闇に光が輝いた』とあります。闇が去って光が輝くのではないのです。闇のただなかで、光が輝くのです。私たちの世界の闇は続くでしょう。その闇のただなかで光をとります。

闇を嘆きつつそれになすべを知らないのではなく、その闇のなかで光となる。『夜も昼も変わるところがない』（詩編139）として聖霊を受けて生きる。闇の誘惑に毅然として「主の祈り」を持つて立つ。この夜を照らす。『あなた方は世の光である』（マタイ5・16）この励ましの言葉は迫害にあった初代教会の闇の中で響いていたのです。神の子として「自分を大切にする」ために、注意深くこの祈りをささげ、主と共に生きる希望と喜びをいただいているのです。

二〇二二年三月二十八日

主の受難の主日

カトリック高松教区 司教

使徒ヨハネ 諏訪榮治郎

【教区の再生と一致】に向けて

司教書簡の流れⅡ三本柱を生きたる教会

二〇一一年 高松教区宣教会大会（教区シノドス）開催

二〇一二年 ・信仰 ↓「ダイナミックメモリー」

二〇一三年 ・共同体 ↓「御ことばの分かち合い」

二〇一四年 ・共同体 ↓「信徒の奉仕職・集会祭儀に向けて」

二〇一五年 ・共同体 ↓「信徒の奉仕職・病者、高齢者訪問に向けて」

「違いが豊かさになる教会共同体に向けて」

二〇一六年 ・現実社会 ↓「いつくしみの特別聖年」を生きたる教会

【現実社会】の中で

二〇一七年 ・現実社会 ↓「社会と共に歩む教会に向けて」

二〇一八年 ・現実社会 ↓「協力宣教」

二〇一九年 ・現実社会 ↓「平和を願う 福音の奉仕者として」

二〇二〇年 ・現実社会 ↓「社会との新しい関係の奉仕者として」

二〇二一年 ・『主の祈り』を黙想する

